亦の名は、弟日賣眞若比賣命を娶りて、生み給へる子、大郎子。亦の名は、意富々杼王。次に、忍坂之大中津比賣命。次に、田井中比賣。次に、田宮之中比賣。次に、藤原之琴節郎子。次に、取賣王。次に、沙禰王（七人）。意富々杼王は、三國君、波多君、息長君、坂田酒人、山道君、筑紫の米多君、布勢君等の祖なり。又、根鳥王、庶妹三腹郎女を娶りて、生み給へる子、中日子王。次に、伊和島王（二人）。又、堅石王の子は、久奴王なり。凡て、此の品陀天皇、御年、一百三十歳。御陵は、川内惠賀の雲伏岡に在り。

標註 **新譯古事記**（中卷）終

△高津宮　宮跡は大坂天王寺より正北なる味原に通ふ中間に平野神社ある地なりといふ

△波多毘能若郎女　後に雄略天皇の皇后

標註 **新譯古事記**（下卷）

仁德天皇の朝

大雀命、難波の高津宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、葛城之曾都毘古の女、岩之日賣命（大后）を娶りて、生み給へる御子、大江之伊邪本和氣命。次に、墨江之中津王。次に、蟻之水齒別命。次に、男淺津間若子宿禰命（四人）。又、上に云へる、日向の諸縣君、牛諸が女、髮長比賣を娶りて、生み給へる御子、波多毘能大郎子。亦の名は大日下王。次に、波多毘能若郎女。亦の名は、長日比賣命。亦の名は若日下部命（二人）。又、庶妹八田

若郎女を娶り、又、庶妹、宇遲能若郎女を娶る。此の二人は、御子、まさゞりき、凡て、此の大雀天皇の御子等、幷せて六王あり。

（男王五、女王一）。伊邪本和氣命は、天下を治めたまふ。次に、蝮之水齒別命も、天下を治めたまひ。次に、男淺津間若子宿禰も、天下を治めたまふ。此の天皇の御世に、大后、石之日賣命の御名代として、葛城部を定め、亦、太子、伊邪本和氣命の御名代として、壬生部を定め、亦、木齒別命の御名代として、蝮部を定め、亦、大日下王の御名代として、大日下部を定めたまひ、若日下部王の御名代として、若日下部を定めたまふ。又、秦人を役して、茨田堤、茨田三宅を作りたまひ、又、丸邇池、依網池を作りたまひ、又、難波の堀江を掘りて、海に通し、又、小椅江を掘り、又、墨江之津を定めたまへり。天皇、高山に登りて、四方の國を見て、

△壬生部　御產部の意にて御產殿に奉仕する部族の民戸なり

△堀江　今の大阪の大川

詔たまはく。國中に烟發たず、國、皆、貧窮し。故に、今より三年に至るまでは、悉く、人民の課役を除けと。是を以て、宮殿破れ壞れて、雨漏れども、都て、修理したまはず、樹を以つて、其の漏雨を受けて、漏らざる處に、遷り避けたまふ。後に、國中を見たまへば、國に煙滿ちたりき。故に人民富めりと爲して、今は、課役を科したまふ。是を以て、百姓榮えて、役使に苦まず。故に其の御世を稱へて、聖帝の世と謂ふ。

其の大后、石之日賣命、甚だ嫉妬深ければ。妃嬪、宮中をも得臨かず、少しにても常に異なる擧動あれば、足摩などして、嫉妬たまへり、天皇、吉備海部直が女、名は、黑日賣。其、容姿端正しと聞こしめして、喚び上げ使ひたまふ。然れども大后の嫉みを畏れて、本國に逃げ下れり。天皇、高台に坐して其の黑日賣が船出

△課役　課は田租及人民より獻らしむる物品役は土木其他に使役する事

△連らく　連り浮よを云ふ△くろさき　備中小田郡△まさづこわぎ　もまさづこはウツクシキ紅顔の美人と云が如し△大浦　難波の海上

するを望み見て、歌ひたまはく。

澳方には　小舟連らゝく
黒崎の　紅顔兒吾妹
國へ下らす

大后、是の御歌を聞きて、大いに怒りまして、大浦に人を遣して、追ひ下ろして、陸路より追ひ去りたまふ。天皇、其の黒日賣を戀ひたまひ、大后を欺きて、淡道島見たまむと曰ひて、行幸ある時に、淡道島にまして、遙かに望みて、歌ひたまはく。

△國見れば　國見をすればなり

襲立
出で立ちて　難波の埼自
淡島　朕國見れば
檳榔の　淤能碁呂島
小島も見ゆ

佐氣都島みゆ

乃ち、其の島より傳ひて、吉備國に行幸あり。黒日賣、其の國の山方の地に、迎へ入れ奉りて、大御飯を獻る。大御羹を煮むとして、其地の菘菜を採める時に、天皇、其の孃子の菘を採む處に到りまして歌ひたまはく。

△吉備人　黒比賣を指す

山方に　蒔ける菘菜も
吉備人と　共にし採めば
樂しくもある哉

天皇、還幸の時に黒日賣の獻れる歌に曰く。

△そきたりとも　遠く離れて居るとも△われすれめや　天皇を忘れ奉らんや

大和方に　西風吹きあげて
雲離れ　退き居り雖
吾忘れめや

△こもりづの　枕詞
△したよはへつゝ　忍び隠れてちぎりをこめ給ふ意
△御綱柏　葉の先尖りて三岐に分れたる柏
△大渡　難波より兵庫への渡場

又歌ひて曰く。

大和方に　往くは誰が夫
隱水の　下ゆ延へつゝ
往くは誰が夫

此れより後、大后、豐樂したまはむとて、御綱柏を採りに、木國に行幸せる間に、天皇、八田若郎女に婚ひたませり。大后は、御綱柏を御船に積み盈てゝ還幸す時に、水取司に使はるゝ、吉備國、兒島の仕丁、己が國に歸らんとし、難波の大渡にて後れたる倉人女の船に遇へり。乃ち、語りて曰く、天皇は、此頃、八田若郎女に婚ひまして、晝夜戯むれ遊びたまへり、大后は、此の事を聞こしめさぬてか、靜かに遊びたまふと語りける。其の倉人女、此の語れる言を聞きて、即ち、御船に追ひ近づきて、仕丁が言へる如く、

△つぎねふや　山城の枕詞
△山城川　淀河の上流木津川
△さしぶを　さしぶよの意しゃ〳〵ぶの水なり

具さに白したり。是に於て、大后大いに恨み怒りて、其の御船に載せたる、御綱柏を悉く海に投げ棄てたまふ。故に、其地を御津前と謂ふ。即ち、宮に入りまさずして、其の御船を他に轉じて、堀江に泝り、河に隨ひ、山代に行幸ありたり。此の時に歌ひたまはく。

繼苗生や　山城川を
川上り　吾上れば
河邊に　生立てる
鳥草樹を　さしぶのき
其下に　生立てる
葉廣　五百箇眞椿
其の花の　照坐し

△みやのぼり　皇后の御本郷なる大和國葛上郡高宮へ上りますと、大和ほ山の意△岳を出て大和を周りて楯を並べたるがごとくなれば、やまとゝつゞけたるなり

其葉の　廣り坐すは
大君　歟

即ち、山代より廻りて、奈良の山口に到りまして、歌ひたまはく。

繼苗生や　山城川を
宮上り　吾上れば
青土　奈良を過ぎ
小楯　倭を過ぎ
吾見が欲し國は　葛城高宮
吾家の邊り

此く歌ひ、還りて、暫らく、筒木の韓人、名は、奴里能美が家に入りたまふ。天皇、大后、山代より還幸せりと聞こしめして、舍人、名は、鳥山と云ふ人を使はしける時に、それを送りたまへる

△筒木の韓人　山城綴喜郡に住める韓人

御歌に曰く。

山城に　追及け追及け　追及鳥山
及き遇はむ歟　吾愛妻に

又續ぎて、丸邇臣、口子を遣はして、歌ひたまはく

御室の　其高城なる
大井子原　大葦子原にある
肝向　心をだにか
相思はずあらむ

又歌ひて曰く。

繼苗生　山城女の
小鍬持ち　打し大根

△肝向ふ　枕詞△心をだにか　朕が心の切なることを思ふべきにそれさへ思はぬと恨み給ふなり。

△根白の　大根の根の白き如くの意是迄次句

にかゝる序なり

△綱ず來ばこそ　大后の手を枕にしたまひし事のなくばこそ

△知らずとも云々　今更知らぬなどつれなく云はるゝは何事ぞ

△水潦　降雨の地上に溜りて流るゝ水をいふ

△涙ぐましも　涙ぐまるゝ

根白の　白腕

纏ず來ばこそ　知らずとも言はぬ

是の口子臣、此の御歌を白す時、雨大いにふれり。其の雨をも避けず、前殿戸に參り伏せば、行き違ひて、後戸に出でたまひ、後殿戸に參り伏せば、行き違ひて、前戸に出でたまふ。匍匐惑ひて、庭内に跪き居る時に、水潦、腰に至けり、口子臣、紅紐著けたる、青摺衣を服たれば、水潦、紅紐に拂れて、青、皆、紅色に變はれり。口子臣の妹、口比賣、大后に仕へ奉れり。故に是の口比賣、歌ひけらく。

山城の　筒木の宮に
物申す　吾兄の君は
涙ぐましも

△三色に變る虫　蠶の事なるべしと奇妙に云ひたるなり

△さわ〳〵云々　奇妙な虫と蠶がしく云ふに

大后、其の所以を問ひたまふ時に、我が兄、口子臣なりと答へ白す。是に於て、口子臣、亦、其の妹、口比賣、及び、奴理能美、三人して議りて、天皇に奏さしめて曰く、大后の行幸ある所以は、奴理能美が養ふ虫、一度は、匈虫に爲り、一度は、殼に爲り、一度は、飛鳥に爲りて、三色に變る奇しき虫あり。此の虫を看そなはしに入りませるのみ。更に、異しき心はなしと。此く奏せば、天皇然らば、吾も奇異と思へば、見に行かむと詔りたまひて、大宮より行幸ありて、奴理能美が家に入りたまへる時に、其の奴理能美、己が養へる三種の虫を、大后に獻つれり。天皇、其の大后の坐ませる殿戸に立ちて歌ひたまはく。

織苗生　山城女の
小鍬持ち　打し大根

より繁る木の如く大勢供人を連れて參り來りたるぞ

△志都歌　靜かに打返して歌ふ歌の名

△一本菅　一株の菅にて八田若郎女の皇子をも產まず獨り居るに喩ふ

△立歟荒れなむ　荒れ衰ふるならむかとの意

△言をこそ　口にこそと云ふに同じ

△すがはらといはめ　菅原とはいへ實はソナタの事なりとの意

清々に　汝が言へ爲こそ
打渡す　彌木榮如
來入り參來れ

此の天皇と、大后と、歌はしたる六の歌は、志都歌の返歌なり。

天皇、八田若郎女を戀ひたまひて、御歌を遣り賜へる、其の歌に曰く。

八田の　一本菅は
子持たず　立歟荒れなむ
可惜菅原　菅原といはめ
言をこそ
可惜清女

八田若郎女の答の歌に曰く。

△おほきみし云々　假令御子は產みまさずとも陛下が私を御氣に召したと詔はゞよしやの獨で居りましても末たのもしく思ひ奉つらんとうち返してよめるなり

八田の　一本菅は
獨り居り雖
天皇し　可と聞こさば
獨り居り雖

故に、八田若郎女の御名代として、八田部を定めたまふ。亦、天皇、其の弟、速總別王を媒として、庶妹。女鳥王を乞ひたまへり。女鳥王、速總別王に語りて曰く。大后の强さに困りて、八田若郎女をも召し入れ賜はず、故に、仕へ奉らじ。吾は、汝が命の妻に爲りなむと思ふといひて、即ち、相婚ませり。是を以て、速總別王、復奏したまはざりき。爾に、天皇、直に、女鳥王の坐す所に幸きありて、其の殿戸の閾の上に坐せり。女鳥王、機にありて服を織れり、爾に、天皇、歌ひたまはく。

△吾王　女鳥を親みて給ふなり△おなじく云ひ給ふ△おろす　はたおろす　衣服の意△たがれろか　誰の意△たれか着せん爲の料△ぞと　の意△たかゆくや　枕詞△みおすひがれ　御禊に料ぞとの意、料はせんカダキの如きものなり

女鳥の　吾王の
機織服　誰料ろ歟

女鳥王答への歌に曰く。

高衍や　速總別の
御襲料

天皇、其の情を知らして、宮に還り入りたまふ。此時其の夫、速總別王の來れる時に、其の妻、女鳥王、歌ひて曰く。

雲雀は　天に翔る
たかゆくや　はやぶさわけ
鷦鷯取らさね

天皇、此の歌を聞きて、即ち、軍を興して、殺したまはむとす。速總別王、女鳥王、共に逃げ去りて、倉椅山に臥りませり。

△鷦鷯取らさね　鷦鷯を取り給への意に天皇を殺し給へと云ふ喩

△梯立　枕詞

△岩搔きかねて　岩に搔きよりかれてに取りすがる手弱女のやさしきに喩ふ

速總別王、歌ひて曰く。

梯立の　倉椅山を
嶮しみと　岩搔きかねて
吾手取らすも

又歌ひて曰く、

はしだての　くらはしやまは
さがしけど　妹と登れば
嶮しくもあらず

△玉釧　玉を以て飾れる臂に纏ふ飾

其地より逃げて、宇陀の蘇邇に到れる時に、皇軍、追ひ到りて殺しまつれり。其の將軍、山部大楯連、女鳥王の御手に纏ける玉釧を取りて、己が妻に與へたり。此の後豐樂したまはむとする時に、氏氏の女等、皆、朝參す。大楯連が妻、其の王の玉釧を己

△日女島　摂津西成郡

△たまきはる枕詞△内の吾兄　うちは大和知宇郡にあそは吾兄臣にて親しみ褒めて云ふ稱

が手に纏きて參れり。是に於て、大后、石之日賣命、自ら、大御酒の柏を取りて、諸氏氏の女等に賜へり。爾に、大后、其の玉釧を見知りたまひて、御酒の柏を賜はず、乃ち、引退けて、其の夫、大楯連を召出でゝ詔りたまはく、彼の王等、無禮に因りて殺し賜へり、是は當然の事のみ。夫の奴や。己が君の御手に纏ける玉釧を膚も熅かきに剝ぎ持ちて、己が妻に與へたるかと。乃ち、死刑におこなひ給へり。亦、或時、天皇、豐樂したまはむとして、日女島に行幸の時に、其の島に、雁、卵を生みたりき。建内宿禰命を召して、歌を以て、雁の卵を生める狀を問ひたまへる其の歌に曰く。

魂來經　内の吾兄
汝こそは　世の長壽人

△空見つ　枕詞

△諸しこそ云々　問ひ給ふは道理であるとの意

△知らむしろ召さんしとてその瑞祥に雁が子を産めるならむとの意

空虛見　日本國に
鴈子產と聞くや

是に於て、建内宿禰、歌を以て語り白さく。

高光日皇子
諸しこそ問ひ賜へ
眞に
吾こそは　とひたまへ
虛空見　世の長人
雁子產と　日本國に
未だ聞かず

此く白して、御琴給はりて、歌ひけらく。

汝皇子や　終に知むと
鴈は子產らし

△本岐　歌祝歌
△兎寸河　和泉大島郡
△高安山　河内高安郡

此は本岐歌の片歌なり。

此の御世に、兎寸河の西の方に、一高木あり。其の樹の影、旭日に當れば、淡道島に逮び、夕日に當れば、高安山を越ゆ。是の樹を切りて船に造れるに、行くこと甚だ捷く、其の船の名を枯野と謂へり。是の船を以て、朝夕は淡道島の寒泉を酌みて、御料の水に獻つる。茲の船の破れたるを以て、鹽を燒き、其の燒き遺れる木を取りて、琴に作りしに、其の音、七里に響えたり。歌に曰く。

枯野を　鹽に燒き
其の餘り　琴に造り
掻き彈や　由良の門の
門中の　海岩に
振立つ　浸漬木の

△由良　淡路津名郡、門は船の渡る道すぢ

△なゞの木　海水に浸りて立てる木、以上五句さや〳〵と云ふ序な

△さや〳〵　琴の音のさやかなるを云ふ

亮〳〵

此は、志都歌の返歌なり。

此の御皇御年、八十三歳。御陵は、毛受の耳原に在り。

履中天皇の朝

伊邪本和氣命、伊波禮の若櫻宮にありて、天下を治めたまふ、此の天皇葛城の曾都毘古の子、葦田宿禰の女、名は、黒比賣命を娶りて、生み給へる御子、市邊忍齒王。次に、御馬王。次に、妹青海郎女。亦の名は、飯豐郎女（三人）。本、難波宮にありし時、大嘗にて、豐明ありし時に、大御酒に樂しみて、寢ねたまへり。其の弟、墨江中王、天皇を取りまつらむとして、大殿に火を著けたり。是に於て、倭漢直の祖、阿知直、盜み出でゝ、馬に乘せまつりて、倭に幸ぎせり。多遲比野に到りて、寤めまして、此處は、

△若櫻宮　大和十市郡櫻井の邊

△多遲比野　河内丹南丹北二郡の内

△たつごも　立つる蓆にて屏風の如きもの

何處ぞと詔りたまへり。阿知直、白さく、墨江中王、大殿に火をつけたまへり、故に率て奉りて、倭に逃げゆくなりとまをす、天皇歌ひたまはく。

丹比野に　寢むと知りせば
防壁も　持て來ましもの

ねむどしりせば

波邇賦坂に到りて、難波宮を望見りたまへば、其の火、猶、炳く見えたり。爾に亦、歌ひたまく。

埴生坂　吾立見れば
炫火の　燃ゆる家群
妻が家の邊

大阪の山口に到りませる時に。一女に遇へり、其の女の白さく。

△たゞにはのらず　眞直に行くべき近路の大坂路なれば告げずといふ意

兵器を持てる人等、多く、茲の山を塞ぎをれり。當麻道より廻りて越え幸きたまふべしと、爾に、天皇、歌ひたまはく。

大阪に　遇ふや處女を
道問へば　直には告らず

當麻道を告る

行幸して、石上神宮にましませり。是に於て其の同母弟、水齒別命、參りて、申さしめたまふ。爾に天皇の詔らしめたまはく。吾、汝が、墨江中王と、同心ならむかとおもへば、逢ひてもの言はじと詔らしめたまへば、僕は、邪心無し。墨江中王と、同心にもあらずと答へたまへり。亦、詔らしめたまはく、然らば、今、還り下りて、墨江中王を殺して、上り來れ、其の時にこそ、吾、必ず、もの言はむと。即ち、難波に還り下りて墨江中王に近侍する所の

隼人、名は、曾婆加理を欺きて、汝吾言ふことを從かば、吾、天皇と爲り、汝を大臣に作して、天下を治めしめむとす、如何にと云ひたまへり。曾婆訶理、命に隨はんと答へ白す。爾に其の隼人に多くの祿を給ひて、然らば、汝の王を殺せと曰ひたまへり。是に於て、曾婆訶理、己が王の厠に入れるを伺ひて、矛を以ちて刺して殺したり。曾婆訶理を率て、倭に上幸せる時に、大阪の山口に到りて、以爲へらく、曾婆訶理、吾が爲めに大功あれども、既に、己が君を殺したるは、是不義なり。然れども、其の功を酬いずば、信なしと謂はむ。其の信を行なはむか、其の情こそ惶しけれ、故に、其の功は報ゆとも、其の身をば滅さむと思ひたまへり。是を以て、曾波訶理に詔りたまはく、今日は、此處に留まりて、先づ大臣の位を給ひ、明日、上り往かむと、山口に留り、即ち假宮を造りて、俄かに、豐樂して、其の隼人に、大臣の位を賜ひ、百官をして拜せしめたまふ、隼人、喜こびて、志遂げぬと思ひけり。其の隼人に、今日、大臣と同盞の酒を飲まむとすと曰ひたまひて、共に飲める時、面を隱すべき大鏡に、其の進むる酒を盛りたり。是に於て、王子、先づ飲みて、隼人後に飲む。隼人、飲む時に。大鏡面を覆ひたり。席の下に置ける劍を取り出でゝ、其の隼人が頸を斬り、乃ち、明日、上りたまふ。故に其地を近飛鳥と謂ふ。倭に到りて、詔りたまはく。今日は、此間に留りて祓禊して、明日出て、神宮を拜せむとすと、故に其地を遠飛鳥と謂ふ。石上神宮に參りて、天皇に、事、既に、平げ訖りて參り上りたりと奏せしめたまへり。召し入れて、相語らひたまふ。天皇、是に於て、阿知直を、始めて藏官に任じ、亦、賴地をも給ふ。此の

△近飛鳥　河内古市郡
△遠飛鳥　大和高市郡

御世に、若櫻部臣等に、若櫻部と云ふ名を賜ひ、又比賣陀君等に比賣の君と謂ふ姓を賜ひ。又、伊波禮部を定めたまふ。此の天皇の御年、六十四歳。御陵は。毛受に在り。

反正天皇の朝

水齒別命、多治比の柴垣宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、御身の長け九尺二寸半、御齒長さ一寸、廣さ二分、上下等しく齊ひて、珠を貫ぬけるが如くなりき。天皇、丸邇の許碁登臣の女、都怒郎女を娶りて、生み給へる御子、甲斐郎女。次に、都夫良郎女(二人)。又、同じ臣の女、弟比賣を娶りて、生み給へる御子、財王、次に、多訶辨郎女。幷せて四王あり。此の天皇の御年、六十歳。御陵は、毛受野に在り。

允恭天皇の朝

△毛受野　和泉大鳥郡中筋付

男淺津間若子宿禰命、遠飛鳥宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、意富本杼王の妹、忍阪之大中津比賣命を娶りて、生み給へる御子、木梨之輕王。次に、長田大郎女。次に、境之黑日子王次に、穴穗命。次に。輕大郎女、亦の名は、衣通郎女(御名を衣通王と云ふ所以は、其の身の光、衣より通り出づればなり)。次に、八瓜之白日子王。次に、大長谷命。次に、穴穗大郎女。次に、酒見郎女(九人)。凡て、この天皇の御子等、九人あり(男王五女王四)。此の九王の中に、穴穗命は、天下を治めたまふ。次に、大長谷命も、天下を治めたまへり。天皇、初め皇位を繼ぎたまはむと爲し時に、天皇辭して、我は、一の長病あれば、位に即くべからずと詔りたまへり。然れども、大后を始めて、諸卿等、堅く奏して止まざるに因りて、天下を治めたまへり。此の時、新良の國主、

△金波鎖漢紀武姓、波鎖は爵、漢紀は王族の號、武は名なり

貢物八十一艘を進つる。朝貢の大使は、名を、金、波鎖、漢紀、武と云へり。此の人、藥の方を深く知れり。故に天皇の御病を治し奉れり。天皇、天下の人々の、氏、姓の忤ひ過てるを愁ひて、味白檮の言八十禍津日前に、探湯の釜を居ゑて、天下の部族の氏姓を定め賜へり。又、木梨之輕太子の御名代として、輕部を定めたまひ、大后の御名代として、刑部を定めたまふ。此の天皇、御年、七十八歲。御陵は、河内の惠賀の長枝に在り。天皇、崩じて後、木梨之輕太子、皇位を繼ぎたまふことに定まれるを、未だ、位に即きたまはざりし間に、其の同母妹、輕大郎女に奸けて、歌よみたまはく。

△足引枕詞
△下樋を走しせ地下に樋をかけて水を走らす意、是迄は次の句の序なり

足引の　山田を作り
山高の　下樋を走しせ

△下聘　密かに通ふ
△下泣　忍び泣き

△志良宜歌　後撰りに歌ふ歌なり

△たしだし　俗にドシドシといふにおなじ。
△ごゝは公然といふ意
△ひとはかゆとも　百官の人々に議られとも
△落さるとも　重き罪の意
△添寢　さされてはしたなられば意
△かりごもれ　枕詞
△みだれば　心の亂るゝなの意

下聘に　吾聘ふ妹を
下泣きに　吾泣く妻を
今日こそは　易く肌觸れ

此は、志良宜歌なり。又歌ひたまはく。

小竹葉に　打や霰の
儲々に　率寢てひのちは
人議かゆとも　眞寢し眞寢てば
可憐と　亂れば亂れ
刈蒋の
さねしさねてば

此は夷振の上歌なり。

△夷振之上歌　歌ひ方の調子によりて名けたる稱

是を以て、百官及び、天下の人ども、輕太子に背きて、穴穂御子

△かくよりこれあめたちやめん　吾が如く皆々此の門に寄り來よ、雨の止むを待だむと云ふ事にて引率したまへる軍勢にとく進み寄りて攻めよといふ意

に歸せり。輕太子畏れて、大前小前宿禰大臣の家に逃げ入りて、兵器を備へ作りたまふ。(其の時に作れる矢は、其の箭の根を銅にしたり。故に其の矢を輕箭と謂ふ)。穴穗王子も、兵器を作りたまふ(此の王子の作れる矢は、即ち、今時の矢なり。是を穴穗箭と謂ふ)。是に於て穴穗御子、軍を興して、大前小前宿禰の家を圍みたまふ。其の門に到りませる時に、大冰雨零れり。故に、歌ひたまはく。

大前　小前宿禰が
鐵門陰　此く倚り來ね
雨立ち止めむ

大前小前宿禰、手を擧げ膝を打ち、舞樂で、歌ひ來れり。其の歌に曰く。

△みやびと　こゝは軍士をさせり△あゆひのこすゞ　袴をかゝげて膝のあたりにて結び其の紐に着くる鈴、上古の旅裝束などの飾りなり△みやびととよむさとびともゆめ　軍士も里人もゆめゆめ[illegible]めき騒ぐなといふ意[illegible]此の響への大意太子を亡し給ふはたやすき事なるにかゝる大軍を起しておしよせ給ふは足結の小鈴の落ちたる些少の事に宮人里人の立騒ぐが如し太子は己れ捕へて奉るべければ騒ぎ給ふこと勿れとなり△宮人振　歌の初の句を取りて名づけたるなり△羽狹の山云々　羽狹山の鳩の如く忍び泣けといふ意

宮人の　　脚帶の小鈴
落ち去きと　宮人響動
里人も謹め

此の歌は、宮人振なり。此く歌ひつゝ來りて曰く、我が天皇の御子、兄王を攻めたまふな。若し、攻めたまはゞ、必ず、人咲はむ。僕、捕へて進らむと。爾に、兵を解きたまへり。故に、大前小前宿禰、輕太子を捕へて、率て進る。太子捕へられて歌ひたまはく。

天飛む　輕の孃女
甚泣かば　人知りぬべし
羽狹の山の鳩の　下泣きに泣く

又歌ひて曰く。

△したゝ　忍び〳〵△寄寢て云々　人目を忍びつゝ寄添ひ寢て後行き去るべし

△問はされ吾が雷否を問へといふ意

△天田振　歌の句を取れるなり

△大君　皇太子を云ふ

△船餘り　枕詞

△吾疊ゆめ　吾が是まで敷し疊を大事にして

天飛　輕媛女
下下にも　寄寢て行去
輕媛女等

輕太子を伊余の湯に流しまつれり。流されたまはむとせし時に、歌ひたまはく。

天飛　鳥も使ひぞ
鶴音の　聞えむ時は

吾名問はさぬ

此の三歌は、天田振なり。又歌ひたはまく。

大君を　島に放らば
船餘り　還り來むぞ
吾疊　齋

遷り來るまでゆめ過ちしたまふなとの意、古へ人の旅行したる家には其人の床の疊を大切に齋ひしなり△言を疊こそ云々　口でこそ云へ實は吾妻よゆめ〳〵過ちなく吾が歸るを待てとなり△相偃濱　夏草の繁きあひたる濱△明して行れ　揖分けて去り給へ

△來長くなりぬ　日久しくなりぬ　枕詞△やまたづかへ　迎意△まつに行かんとゆふ意△まつにはまたじ　待つには待たれずとなり

言をこそ　疊といはめ
吾妻は　謹

此の歌は、夷振の片下なり。其の衣通王、歌を獻る。其の歌に曰く。

夏草の　相偃の濱の
蠣貝に　足蹈ますな
明して行去

後に、衣通王、戀慕に堪へずして、追往く時に、歌ひたまはく。

君が旅行　來長く經りぬ
接骨木の　迎へを行かむ
待には待たじ

此に、山多豆と云へるは、今、造木といふ者なり。追ひて到れる

△隱城　枕詞

△幡　葬りに用ふる幡△おほをにしながさだめる云々　死なば共にと大凡に墓所まで定めおきたるイトシの妻よあはれとの意、大峽に凡墓ないひかけたり、凡墓とは凡そに墓をかねて定めたる所をいふ△つくゆみのこやるこやりも云々　槻弓の如くに伏し梓弓の如く起き數多の月日を起き伏して此の遠き島までたごり來て再び對面するひ妻イトシヤの意

時に、輕太子待ち受けて尋ね來りし事を、憐れに懷ひて、歌ひたまはく。

隱城の　果瀨山の
大峽には　幡張り立て
眞小峽には　幡張り立て
凡墓にし　汝が定める
思妻阿怜
槻弓の　伏伏も
梓弓　立てり立てりも
後も取見る　念妻阿怜

又歌ひて曰く。

隱國の　長谷の川の

△かみつせにいぐひを　うちしもつせに云々　いとしき妻の語を聞けば我が爲めに長谷の川瀨に齋杙を打ち玉鏡を懸けてつゝが無らん事を祈れりゝ聞くこそ嬉しけれの意△またまなすあがもふいも云々　其の掛けたる玉の如く我が愛らしく思ふ妹、其の鏡の如く我が可愛く思ふ妻の意△ありといはゞこそにいへにもゆかめ云々　吾が思ふ妻の故鄕にあればこそ家にも還らめ、國をもしたはめ、今かく追ひ來ませる上は家をも國をも何かはせんとの意

△讀歌　雅樂寮にて曲節なく朗讀する歌なり

△石上之穴穗之宮　大和山邊郡田村

上瀨に　齋杙を打ち、
下瀨に　眞杙を打ち
いぐひには　鏡を掛け
まぐひには　眞玉を掛け
眞玉如　吾が思ふ妹
鏡如　吾が思ふ妻
在りと云はゞこそに　家にも往かめ
國をも偲ばめ

此く歌ひて、即ち、共に自ら死にたまへり。此の二歌は讀歌なり

安康天皇の朝

穴穗御子、石上之穴穗宮にありて、天下を治めたまふ。天皇、同母弟、大長谷王子の爲めに、坂本臣等が祖、根臣を、大日下王の

△玉縵　玉を以て飾としたる冠

許に遣はして、詔らしめたまはく、汝が妹、若日下王を、大長谷王子に婚せむとす。故に獻るべしと。爾に、大日下王、四たび拜して白したまはく。若し、此かる大命も有らむかと疑へる故に、外にも出さずて置けり。恐し、大命に隨ひ進め奉らむと。然れども言を以て白すは、無禮なりと思ひ、其妹の禮物として、押木之玉縵を持たしめて獻れり。根臣、即ち、其の禮物の玉縵を盜み取りて、大日下王を讒して、大日下王は、勅令を受けずして、己が妹は、同族の妃に爲むといひて、横刀の柄に手をかけて、怒りたりと白す。天皇、大いに怒りまして、大日下王を殺して、其の王の嫡妻、長田大郎女を取り持ち來りて、皇后と爲したまへり。此の後、天皇、神牀に於て、晝寢あり。其の后と語りて、汝、思ふ所ありやと曰ひたまひければ、わが天皇の敷き澤みを被ふれ

ば、何の思ふ所かあらむと答へたまふ。其の大后の先の子、目弱王。是の年七歲になりたまへるが、其時、殿の下に遊びませり。天皇、其の少き王の殿の下に遊びませることを知らずして、大后に詔りたまはく。吾は、恒に思ふ所あり、何ぞといへば、汝の子、目弱王、成人の時、吾が、其の父王を殺せし事を知りなば、邪心あらむかと。其の殿の下に遊びませる目弱王、此の言を聞きて、便ち、天皇の御寢ませるを伺ひて、其の傍なる大刀を取りて、天皇の頸を打ち斬りまつりて、邪夫良意富美が家に逃げ入れり。此の天皇、御年五十六歲。御陵は、菅原の伏見岡に在り。大長谷王子、當時、童男なりしが。此の事を聞きて、慷き怒り、其の兄、黑日子王の許に到りて、人、天皇を取りまつれり、如何に爲むと曰ひたまふ。然るに、黑日子王、うちも驚かず、怠慢に

△小治田　大和高市郡

するの心あり。是に於て、大長谷王、其の兄を詈りて、一には、天皇にまし、一には兄弟にますを、人の其れを殺したる事を聞きつゝ、驚きもせずして、怠慢にするとは、何ぞ恃みなき、と云ひて即ち、其の衿を握りて、控出でゝ刀を抜きて、打ち殺したまへり。亦、其の兄、白日子王に到りて、前の如く、告げたるに、此王も、黒日子王の如く、意にも留めざる姿なれば、即ち、其の衿を握りて、引き來りて、小治田に到り、穴を掘りて、立ちながらに埋みしかば、腰を埋むる時に至りて、兩の目走り拔けて死にたまへり。亦、軍を興して、都夫良意美の家を圍む。彼れ軍を興して、待ち戰ひて、射出る矢、葦の散り來るが如し。是に於て、大長谷王矛を杖つきて、其の内を臨みて曰はく、我が娶らむと約したる孃女は、若し、此の家に有りやと、都夫良意美、此の言を聞

△苑人　御苑に使役せらるゝ民

△臣連　こゝでは朝廷に奉仕する諸臣

きて、自ら出で、佩ぶる所の兵を解きて、八度拜みて、白しけるは、先日に問ひ賜へる女子、訶良比賣は進つらむ。亦、五處の屯宅を副へて獻らむ。（所謂、五村の屯宅は、今の葛城の五村の苑人なり）。然るに、其の參り向かはざる所以は、往古より、今に至るまで、臣連の王の宮に隱るゝことは聞けど、王子の臣の家に隱れませることは未だ聞かず。是を以て、思ふに、賤奴、意富美は、力を竭して、戰ふと雖ども、更に、得勝ちまつらじ。然れども、己を恃みて、隱れたまへる王子は、死ぬとも棄てまつらじ。此く白して、亦、其の兵を取りて、還り入りて戰へり。力窮き、矢も盡きぬ、今は、得戰はじ如何にぜむと。其の王子、然らば、更に、爲むすべなし、今は、吾を殺せよと答へたまへり。刀を以て、

△宇多豆物云ふ　よかぬ物云ふなり

其の王子を刺し殺しまつりて、乃ち、己が、頸を切りて死ねり。
茲より後、淡海の佐々紀山君の祖、名は韓帷白さく、淡海の久多綿之蚊屋野に、猪鹿多くあり、其の立てる足は、荻原の如く、捧げたる角は、枯樹の如しと。此の時、市邊之忍齒王を相率ひて、淡海に行幸あり、其の野に到りて、各自、假宮を作りて、宿りませり。明旦、未だ、日も出でぬ時に、忍齒王、何心なく、馬に乗りしまゝ、大長谷王の假宮の傍に到り、馬を停めて、大長谷王子の伴人に詔りたまはく。未だ寤めざるにや、早く白すべし、夜は、既に、明けたり、獵庭に往くべしと。乃ち、馬を進めて出行きぬ。爾に、大長谷王の御所に侍ふ人ども、宇多豆物云ふ王子なれば、應に愼しむべし、御身をも堅めたまふべしと白せり。即ち、衣の中に甲を服、弓矢を取り佩かして、馬に乗りて出で行き、倏忽の

△吹須婆　河内交野郡楠葉村

間に、馬を往き雙ばして、矢を拔きて、其の忍齒王を射落し、乃ち、亦、其の身を切り、馬槽に入れて、平地と等しく埋めたり。是に於て、市邊王の王子等、意富祁王、袁祁王（二人）。此の變を聞きて、逃げ去りたまへり。山代の苅羽井に到りて、御粮食す時に、面黥せる老人來りて、其の粮を奪へり。其の二王、粮は惜まぬを、汝は、誰人ぞと言ひたまへば、我は、山代の猪飼なりと答ふ。久須婆之河を逃げ渡りて、針間國に至り、其の國人、名は、志自牟が家に入り、身を隱して、馬飼、牛飼にぞ役はれいましける。

△長谷　大和式上郡

雄略天皇の朝

大長谷若健命、長谷朝倉宮にありて、天下を治めたまふ。この天皇、大日下王の妹、若日下部王を娶りませり、（子無し）、又、都夫

△呉原　大和高市栗原
△日下　河内

良意富美が女、韓比賣を娶りて、生み給へる御子、白髪命。次に、妹若帶比賣命（二人）。白髪太子の御名代として、白髪部を定め、又、長谷部舍人を定め、又、河瀬舍人を定めたまふ。此の時に呉人、渡り來れり。其の呉人を呉原に置く。故に、其他を呉原と謂ふ。初め、大后、日下にある時、日下の近道より河内に行幸し、山の上に登りて、國内を望みたまへば、堅魚木を上げて、屋舍を作れる家あり。天皇、其の家を問はしめたまひしかば、志幾之大縣主が家なりと答ふ。天皇、詔りたまへるは、奴や、己が家を、天皇の宮殿に似せて造れりと。即ち、人を遣はして、其の家を燒かしめたまふ時に、其の大縣主、懼れ畏みて、稽首して白さく。奴なれば奴ながらに覺らずて、過ち作れり。甚だ畏れ多しと。故に能美之御幣物を獻つる。白き犬に布を繫けて、鈴を著けて、

△都麻杼比の物　今の結納

△壓鷄　枕詞△平群　彼戸　大和△こちん〳〵　此戸△いくみだけおひて繁れる竹の入り交りて生ひたる△ふ△立てる△生ひ繁れたる竹なり△ふ△のちもく

己が一族、名は、腰佩と謂ふ人に、犬の繩を取らしめて獻つれり。故に、火を著くることを止めしめたまふ。即ち、其の若日下部王の許に行幸して、其の犬を賜ひ、詔らしめたまはく、此の物は、今日、道に得つる奇しき物なり、故に、都麻杼比の物とすと云ひて、賜はる。是に於て、若日下部王、天皇に奏さしめたまはく。日に背きて行幸せる事、甚だ恐ろし、己、直ちに參り上りて仕へ奉らむと。是を以て、宮に還幸の時に其の山の坂上に行き立ちて歌ひたまはく。

日下部の
壓鷄
此方の山と
平群山の
此方の
山の峽に
立榮ゆる
葉廣隱白樫

本方には　人組竹生ひ
末方には　足繁竹生ひ
いくみだけ　入寵は寢ず
たしみだけ　慥には率寢む
後もくみ寢む　其思ひ妻恨怜

みれむ云々　後々は永く隱り居んと思ふ其の思ひ妻ぞ愛らしきとの意。

即ち、此の歌を、女王の使に持たしめて、返したまへり。

亦、或る時、天皇、遊行しつゝ、美和河に到りませる時に、河邊に、衣洗ふ童女あり。其の容姿、甚だ麗かりき。天皇、其の童女に、汝は誰が子ぞと問はれければ、己が名は、引田部の赤猪子と謂すと答ふ。詔らしめたまへらく、汝、嫁がずてあれ、今召さむと曰ひて、宮に還りたまふ。其の赤猪子、天皇の命を仰ぎ待ちて、既に、八十歳を經たり。是に於て赤猪子、以爲へらく、命を

△八十歳　多くの年を重れたる事にて八十年と云ふにはあらず

待つ間に、已に多くの年を經て、姿體痩せ萎みてあれば、更に、恃みなし、然れども、待ちつる情を顯し白さずては、心晴れずして、忍ばれずと。數多の魚鳥菜蔬を持たしめて、參り出て獻つれり。然るに、天皇、先に命じたまへる事をば、既に忘れて、其の赤猪子に問ひたまはく。汝は、如何なる老女ぞ、何の故に、參り來つると。赤猪子答へて白さく、其の年其の月に、天皇の命を被り、今日まで、大命を仰ぎ待ちて、八十歳を經たり、今は、容姿、既に老いて、更に、恃みなし、然はあれども、己が志を顯はし白さむとして、參りたりと答ふ。天皇大いに驚きたまひて。吾は、既に先の事を忘れたり、然るに、汝、操を守り命を待ちて、徒に盛年を過しゝ事、甚だ愛悲しと詔りたまひて、婚さむと欲すれども、其の極く老いぬるに憚りたまひて、得婚さずて、御

△みもろのいつかしがもと　大三輪の社の神木と齋く樹の木は忌み畏むものなるが故の意

△ゆゝしきかも　云々吾は昔の契約を忘れ果てゝゆゝしく畏むべきあやまちをなしたることよの意

△ひけたのわかくるすはら　序詞　△わかくへに　若かりしほどにの意

△みもろにつくやたまがき　云々大三輪の社の御鬘籬を宮人が其の年來齋き來りつゝ今年

歌を賜へり。其の歌に曰く。

御諸の　嚴白樫が本
白樫が本　ゆゝしき哉
白樫原媛女　若栗栖原
引田の　率寢てましもの
若く間に
老にける哉

又歌ひて曰く。

赤豬子が泣く涙に、其の服たる丹揩の袖、悉く濕れぬ。其の大御歌に答へまつれる歌に曰く。

御諸に　齋や靈能
齋き餘し　誰にかも依らむ

途にていづれの神にか依らんとの譬へにて餘命のあらん限りはよそながらも陛下をこそとの意

△乏しきろかも　羨しいかなとの意

△呉床　椅子の如きもの

神の宮人

又歌ひて曰く。

日下江の　入江の蓮
花蓮　身の盛人
乏しきろ哉

爾に、其の老女に、多くの物を給ひて、返し遣りたまふ。此の四歌は、志都歌なり。

天皇、吉野宮に行幸せる時、吉野川の濱に、童女あり。其の形姿美麗かりき。故に、是の童女を婚して、宮に還りませり。後に、更に、亦、吉野に行幸せる時に、其の童女の遇ひし所に留りて、其處に、大御呉床を立て、其の御呉床に坐して、琴を彈かして、其の嬢子に舞はしめたまふ。其の嬢子、好く舞へるに因りて、御

△神の御手　天皇の御手なり

△常世にもがも　何時迄も樂しく舞ひてあれ

△阿岐豆野　大和吉野郡四河村

△安見しゝ　天下を安らかに知しめす

歌を作りたまへり、其の歌に曰く。

呉床座の　神の御手以ち
彈琴に　舞ひ爲る女
常世にもがも

即ち、阿岐豆野に行幸して、御獵せる時に、天皇、御呉床に坐しけるに、蜻蛉、御腕を咋ひけるを、蜻蛉來りて、其の蜻を咋ひて、飛びゆけり。（蜻蛉を訓みて阿岐豆と云ふ）。是に於て御歌なしたまへる、其の歌に曰く。

三吉野の　小牟漏岳に
猪鹿伏すと　誰れぞ
大前に奏す
安見しゝ　吾大君の

△名に負はむ　名に附けんと

△そちみつ　枕詞

△宇多岐　怒りて咽を鳴らしうなる也

猪鹿待つと　呉床に座し
白服の　袖着具ふ
手腕に　虻掻き着き
其の虻を　蜻蛉速咋ひ
如此　名に負はむと
虚空見　大和の國を
蜻蛉島と云

故に、其の時より、其の野を、阿岐豆野と謂へり。又、或る時、天皇、葛城の山上に登りましき。爾に、大猪出でたり。即ち、天皇、鳴鏑を以ちて、其の猪を射たまへる時に、其の猪怒りて、宇多岐て依り來れり。天皇、其の宇多岐を畏れて、榛の上に上りたまふ。歌ひて曰く。

△あそばしゝ　射給ひしなり

△在丘の云々　丘に有合せたる榛の木の枝よよく我を救ひくれしよとの意

△鹵簿　御行列

安見しゝ　吾大君の
あそばしゝ　猪の惱猪の
宇多岐畏こみ　朕逃げ上りし
在丘の　榛の木の枝

又、或る時、天皇、葛城山に登りませる時、百官、悉く紅紐を着けたる、青摺の衣を給はりて服たり。時に、其の向ひの山の尾より、山の上に登る人あり。宛も、天皇の鹵簿に等しく、其の裝束の狀及び、人數に至るまで相似たり。天皇、望て、問はしめたまはく。茲の倭國に、吾を除きて、亦、王は無きを、今、誰人ぞ、此くて行くと問はしめたまひしかば、答ふる狀も、天皇の命の如くなりき、是に於て、天皇、大いに忿りて、矢刺したまひ、百官、悉く、矢刺しければ、其の人等も、皆、矢刺せり。故に、天皇、亦問はしめたまはく、然らば、其の名を告げよ、各々、名を告げて、矢を放たんと。答へて曰く。吾、先づ問はれたれば、吾、先づ名告せむ、吾は、惡事も一言、善事も一言、言離之神、葛城之一言主之大神なりと申したまふ。是に於て、天皇、惶れ畏みて白したまはく。恐し、我が大神、眼のあたり見奉らむとは覺らざりきと、大御刀、及び、弓矢を始めて、百官どもの服たる衣服を脱がしめて、拜みて獻つれり。其の一言主大神、手を打ちて、其の捧物を受けたまふ。天皇の還幸す時、其の大神、山を降りて、長谷の山口に送り奉れり。是の一言主之大神は、彼の時、初めて顯れたまへるなり。

又、天皇、丸邇之佐都紀臣が女、袁杼比賣を婚ひに、春日に、行幸せる時、媛女の道に逢へるが、行幸を見て、岡邊に逃げ隱れた

△いは隠る　いは發語

△金鉏も云々　微にて作れる鉏の五百本もあらば少女の隠れたる岡の土を鋤き返して見んとの意

△百枝槻　枝の繁りたる白ケヤキの木

り。御歌したまへる、其の御歌に曰く。

媛女の　隠る岡を
金鉏も　五百箇欲得
鉏撥ぬる物

故、其の岡を、金鉏岡と謂へり。又、天皇、長谷の百枝槻の下に坐して、豐樂せる時に、伊勢國の三重の媛、大御盞を捧げて獻れり、其の百枝槻の葉落ちて、大御盞に浮べり。其の媛、落葉の盞に浮べるを知らずして、猶大御酒を獻りけるに、天皇、其の盞に浮べる葉を看そなはして、其の媛を打ち伏せ、刀を、其の頸に刺し充て、斬りたまはむとする時に、其の媛、天皇に、白しけらく。吾が身を、殺したまふな、白すべき事ありと。即ち、歌ひけらく。

△日代宮は　景行天皇住せ給ふ竹の根云々

△以上御庵の土の軽きなり

△以上日代宮にて發語をいひたる詞なり

△枕詞　いきづきの如く築きたる詞

△枕詞　日代宮をほめたる詞

△以上日代宮の意にて發語をみ

△枕詞　きさく

△枕詞　ひまのみかざ

△以ちて作れる御檜の木を意にて檜に日をかけこゝでは東に對して西を云へり

縄向の
朝日の
夕日の
竹の根の
木の根の
八百土よし
眞木析
新嘗屋に
百、足
上枝は
中枝は
下枝は

日代の宮は
日照宮
日耀宮
根足る宮
根蔓延宮
杵築の宮
檜の御門
生立てる
槻が枝は
天を覆へり
東を覆へり
鄙を覆へり

△おちふちばへ落ち△なしみ△あれとりいふ△おなへうのきのしこりぎぬ△三重妹枕詞自身△酒の一△名をきあぶら△なみてないひなら△りみてなしとた云ふによろ△古傳にをろこころをなりこと△にをろこころをろこと△傳にあに鹽をろこと△ろへるのこと△りにはの國る土を取りて來て出れて浮れ

枝の上枝に中枝になかつえの下枝にしづえの萠衣の捧がせる浮し脂皆凝々に高光事の語言も

枝末葉は落觸らばへえのうらばゝ落觸らばへえのうらばゝ三重の子が瑞玉盃に落浸漬障是も甚に恐こし日皇子をば此

此の歌を獻りしかば、其の罪赦されたり。爾に、大后、歌はしけ

△事の語言も云々之を後世まで語り傳ふるためなり

△たけち△塩竈や高きかなる所△由なつ云ふまま△椿枝の繁れる△其葉の心葉の廣く美しく給へる三重御天皇の廣く美しく給へる

る、其の歌に曰く。

大和の小高有新嘗屋に葉廣其葉の其の花の高光豐御酒

此の高市に市の堆生立てる五百箇眞榊廣り坐し照り坐す日皇子に献つらせこをば

ことのかたりごともて、天皇、歌はしけらく。

百敷城の大宮人は

△領巾婦人の頂上の飾に用ふる白色のきぬ也鶴の肩より胸にかけて垂れたるさまの領巾を掛けたるに似たれば喩へたるなり

△鶴鶴云々多くの宮人の愛を引きて並べる人の鶴鶴の尾を引きて多くが群れたるに似たるを云ふ酒みづくたしになりて酩酊するらし

△天語歌　餘り事歌の意にて酒宴の餘興に多く歌ひし由

△水潜ぐ　オミのオに係けたり△ほだり　銚子の如きもの△取らせ　取るを延べて云へるなり△したがたくやがたくとらせ銚子をシツカリ持てといふ意△ほだ

鶏　鳥　領巾取掛けて
鶴　鶴　尾引合
庭　雀　群統り居て
今日も　鰍　酒眞漬らし
高　光　日の宮女
ことのかたりごとも　こをば

此の三歌は、天語歌なり。故に、此の豊樂に、其の三重の婇を譽めて、物を多く給へり。是の豊樂の日、亦、春日之袁杼比賣が、大御酒献る時に、天皇、歌ひたまへる。

水潜ぐ　臣の嬢女
秀樽取らすも　堅く取せ
秀樽取り

りとらすこ　袁杼比賣をさす

△宇岐歌　盞歌に酒を盞につぐ時に謳ふ歌△枕詞の意△やすみしし　今の脇息のごときもの△いたにもがあせを　脇息の板にもがなし吾兄に天皇の御傍にあるをうらやみていへるなり

△多治比の高鶴　河内國丹北郡島泉村と丹南郡島泉村との境△伊波禮之甕栗宮　大和國十市郡池内御厨子村

慥　堅く　彌堅く取らせ
秀樽取らす子

此は、宇岐歌なり。爾に、袁杼比賣、歌を献つれる、其の歌に曰く。

安見爲　吾大君の
朝影には　倚り立し
夕影には　倚り立す
脇机下の　板にもが吾兄を

此は、志都歌なり。

天皇、御年、一百二十四歳。御陵は、河内の多治比の高鶴に在り。

清寧天皇の朝

白髮大倭根子命、伊禮波の甕栗宮にありて、天下を治めたまふ。

△夫子人を尊びて云ふにて山部小楯を指す

此の天皇、皇后ましまさず。御子もましまさゞりき。故に、御名代として、白髪部を定めたまふ。天皇、崩じて後、天下を治ひべき王ましまさず、是に於て、皇嗣たるべき王を尋ぬるに、市邊忍齒別王の妹、忍海郎女。亦の名は、飯豐王。葛城忍海の高木角刺宮にあり、爾に、山部連小楯、針間國の宰に任ぜらるゝ時に、其の國の人民、名は、志自牟が新室に到りて祝宴を開く。酒酣はなる時、次第のまゝに、皆舞へり。燒火の童子二人、竈の傍に居たり。其の童子等にも舞はしむるに、其の一人の童子、汝兄、先づ舞へと曰へば、其の兄も、汝弟、先づ舞へと曰ふ。此く相讓る時に其の會へる人等、其の相讓れる狀を咲ふ。遂に、兄、先づ舞ひ訖りて、次に、弟の舞はひとする時に、詠じて曰く。

物部の、我が夫子が、取り佩ける、大刀の手上に、丹畫著け、其

△手上柄△丹畫著け△赤土△赤幡△赤幡を裁ち△五十鈴△五十鈴の緒△五十鈴の緒には△三尾△三尾の竹を△本訶岐苅り△末押縮す魚簀△八弦琴を調べたる如△天の下治め賜ひし△伊邪本和氣天皇の御子△市邊之押齒王の△奴末

△歌垣男女相集り歌ふ以ちて情を通づる遊戯

の緒には、赤幡を裁ち、赤幡立てゝ、見れば五十隱る、山の三尾の、竹を、本訶岐苅り、末押縮す魚簀、八弦琴を調べたる如、天の下治め賜ひし、伊邪本和氣天皇の御子、市邊之押齒王の、奴末

と、のりたまへば、即ち、小楯連、聞き驚きて、床より墮ち轉びて、其の室なる人等を追ひ出して、其の二王子を左右の膝の上に坐さまつりて、泣き悲しみて、人民を集めて、假宮を作りて、其の假宮に坐さまつり、驛使を派し上れり。是に於て其の姨、飯豐王、聞き歎びて、二王を宮に上らしめたまふ。

天下を治めたまはむとせし間、平群臣の祖、名は、志毘臣、歌垣に立ちて、其の袁祁命の婚さむとする美人の手を取れり。其の嬢子は、菟田首等が女、名は、大魚といへり。袁祁命も、歌垣に立

△おほみやのをとつは
だで寒祁王のみかたぶけり
△寒祁王の御殿の屋根の端の隅が見苦しく傾きて
ちて王子のとい給へて即意
ほせの云々の謠給へ答へし
たるなり、王の歌に
挑へ給はず只御一人を
み淋しけに立ち給
へのるそのの住みの給へる
御殿のさまの見苦しきなき
に譬へて御り率れる
△おほだくみをぢなみ
こそすみかたぶけれ隅
大工が拙劣なる故にに
が傾きたるなり吾於
て志毘臣が歌を反意
し給ふ毘臣

ちたまふ。是に於て志毘臣歌ひけらく。《志毘臣の歌を先にしたるは次第の亂れたるにて、書紀のごとく王子の歌「しほせの云々」を最初にするが正しきなり。今（）の印の内に番號を記して、其の順序を知らしむ》

(三) 大宮の　彼鯖手
隅傾ぶけり

此く歌ひて、其の歌の末を乞ふ時に、袁祁命歌ひたまはく。

(四) 大匠　拙劣こそ
隅傾ぶけれ

志毘臣、亦、歌ひけらく。《實は袁祁王の御歌なり、紛れて此に入る》

(五) 大君の　心を寛らみ

△大君寒祁王自から詔ふなり
△こゝろをゆちみより心寛やかなるに
△寒祁王の意やへに
しばがきと云々
する垣根の内に踏
入らるとなり、
意さて
意大寛この
なり吾心
ばば宥大
若嬢怨しは立
子を吾立
を得て入
堅めて汝
垣を防
ち破くと
に敷しも
おくぞ得
とれなべ
なり先け
汝打
△波折　波の高く立つ事
△鯖手　鯖に譬ひて

△八節結り　垣を幾重にも結ひたるなり
△截む柴垣　截ぶは假令王子を云々
此柴垣を截む柴垣を守る
柴垣も其
必ず取り又
返すべし
となり

臣の子の　八重の柴垣
入立たずあり

是に於て、王子、亦、歌ひたまはく。《此歌最初にあるべきを、紛れて此に入れり》

(一) 潮瀬の　波折を見れば
遊び來る　鮪が鯖手に
妻立てり見ゆ

志毘臣、愈々怒りて歌ひけらく。

(六) 王の　王の柴垣
八節結り　結り廻ぼし
截む柴垣　燒む柴垣

王子、亦、歌ひたまはく。《實は、志毘臣の歌にて(一)潮瀬の歌の次

△大魚よし　枕詞△鮪衝く海人　縷子を指す　衝く海人は附繩ふにかゝる　△其有れば　縷子が此附繩ひあれば魚　△鮪に附繩ひあれば魚　子はさぞ羨しく戀しかむとの意

にあるべきが、紛れて此に入れるなり》

(二)大魚よし　鮪衝く海人よ
其有れば　心裏戀ほしけむ
鮪衝く

此く歌ひて、挑み明して、各退けり。明旦、意富祁命、袁祁命、二王子議して曰く。凡て、朝廷の人等は、旦には朝廷に赴き、晝は志毘が門に集まる。今は志毘、必らず寢たらむ。其の門に人も無けむ。故に今ならずば、謀り難けむと云ひて、即ち、軍を興して、志毘臣が家を圍みて、殺したまふ。是に於て二王子、互に天下を讓りたまふ。意富祁命、其の弟、袁祁命に讓りて曰はく、針間の志自牟が家に住める時に、汝が命、名を顯したまはざれば、更に、天下を治めむ君とはならざりしなり。是れ全く汝が命の功

なり。故に吾兄には有れども、猶ほ汝が命、先づ天下を治めてよといひて、堅く讓りたまふ。故に、得辭みたまはずて、袁祁命、先づ天下を治めたまへり。

顯宗天皇の朝

袁祁之石巢別命、近飛鳥宮にありて、八歲天下を治めたまふ。この天皇、石木王の女、難波王を娶りたまふ。御子なかりき。此の天皇、其の父市邊王の御骨を求めたまふ時に、淡海國なる、賤しき老媼あり、曰く。王子の御骨を埋みたりし所は、吾、能く知れり、其の御齒を以て知るべしと。（御齒は、百合の根の如く、押齒として重なり生えたり）。民を起てゝ、土を掘り、其の御骨を求め、之を獲て、蚊屋野の東の山に、御陵を作りて、葬りまつり、韓帒が子等に、其の御陵を守らしめたまふ。還幸の後、老媼を召して、

△鐸　鈴の大なるを云ふ

△百傳ふ　多くの野山を傳ひ歩く意　△鐸ゆらくも　鐸のゆらぐ音がするあれば置目が來たのであらう

其の地を忘れず見置きて知れる事を譽めて、置目老媼と云ふ名を賜ひ、仍て、宮の内に召し入れて、敦く廣く慈み賜へり。故に、其の老媼の住む屋をば、宮邊近く作りて、日毎に、必ず、召したまふ。大殿の戸に鐸を懸けて、其の老媼を召さむとする時は、必ず、其の鐸を引き鳴らしたまへり。御歌讀みたまへる、其の歌に曰く。

淺茅原　小谷を過ぎて
百傳　鐸ゆらくも
置日來らしも

是に於て置目老媼、僕甚く老いたれば、本國に歸りたしと白す。白すがまゝに歸したまふ時に、天皇、見送りて歌ひたまはく。

置目もや　近江の置目
明日よりは　見えずかもあらむ
深山隱りて

△見えずかもあらむ　見えずなるであらうか名殘り惜い事であるとの意

△見占　見覺えしむる事なり

△父王　市邊王
△大長谷　雄略天皇

初め、天皇、難に逢ひて、逃げたまふ時に、其の御榱を奉ひし、猪飼の老人を求めたまふ。是に求め得たるを、喚び上げて、飛鳥河の河原に斬りて、悉く、其の一族の膝の筋を斷ちたまへり。是を以て、今に至るまで、其の子孫、倭に上る日、必ず、自ら、跛ぐなり。其の老人の所在を能く見占めき。故に其地を志米須と謂ふ。天皇、其の父王を殺したまひし、大長谷天皇を深く怨みまつりて、其の靈に報いむと欲し。大長谷天皇の御陵を毀らむとして、人を遣す時に、皇兄意富祁命、奏したまはく。是の御陵を毀らむには、他人を遣すべからず、僕、自ら行きて、天皇の御心の如く毀り來らむと。天皇、然らば、其の如く行きたまへと詔りあ

り。是を以て、意富祁命自ら下りて、其の御陵の傍を、少しく掘りて、還り上り、既に、掘り壞りぬと、復奏したまふ。天皇、其の早く還り上りませるを異しみ、如何に毀りたまひしぞと、問ひたまへば、其の御陵の傍の土を少しく掘れりと答へたまふ。天皇、詔りたまはく。父王の仇を報いむと欲ふなれば、必ず、其の陵を悉く破壞るべきに、何ぞ少しく掘りたまひしぞと。問ひたまへば。答へて曰く。然か爲つる所以は、父王の怨みを、其の靈に報いむと欲ほすは、誠に理あり。然れども、大長谷天皇は、父みこの怨にはあれども、また、我が從父なり、亦、天下を治めたまひし天皇なるを、今、單に、父王の仇といふ志をのみ取りて、天下を治めたまひし天皇の陵を悉く破らば、後人、必ず誹謗りまつらむ。唯、父王の仇は、報いずばある可らず。故に、其の陵邊を少しく

△從父　父の從兄弟なり

掘れり。既に、是く耻を見せまつりてあれば、後の世に示すにも足らむと。此く奏しまつれば、天皇、是も大いに理あり、其の如くして可なりと答へたまり。天皇崩じて、即ち、意富祁命、皇位を繼ぎたまへり。此の天皇、御年、三十八歳。八歳天下を治めたまふ。御陵は、片岡の石杯岡の上に在り。

△石坏岡　大和葛下郡下田村字北今市

△石上廣高宮　大和山邊郡喜殿村

△若雄　雄略天皇

△若雀　武烈天皇

仁賢天皇の朝

意富祁命、石上廣高宮にありて、天下を治めたまふ。この天皇、大長谷の若建天皇の御子、春日大郎女を娶りて、生み給へる御子、高木郎女。次に、財郎女。次に、久須毘郎女。次に、手白髮郎女。次に、小長谷若雀命。次に、眞若王。又、丸邇日爪臣の女、糠若子郎女を娶りて、生み給へる御子、春日山田郎女。此の天皇の御子たち、併せて七王あり。此の中に、小長谷若雀命は、天下を治

△列木宮　大和式上郡出雲村の北

△品太　石神天皇

△玉穗宮　大和十市郡

めたまふ。

武烈天皇の朝

小長谷若雀命、長谷の列木宮にありて、八歳天下を治めたまふ。此の天皇、太子ましまさず。故に、御子代として、小長谷部を定めたまふ。御陵は、片岡の石抔岡に在り。この天皇、既に崩じたまひて、皇位を繼ぎたまへべき王ましまさず。故に品太天皇の五世の孫、袁本杼命を、近淡海國より、上りまさしめて、手白髮命に合せ、天下を授けたまふ。

繼體天皇の朝

袁本杼命、伊波禮の玉穗宮にありて、天下を治めたまふ。この天皇、三尾君等が祖、名は、若比賣を娶りて、生み給へる御子、大郎子。次に、出雲郎女（二人）。又、尾張連等が祖、凡連が妹、目

子郎女を娶りて、生み給へる御子、廣國押建金日命。次に、建小廣國押楯命（二人）。又、意富祁天皇の御子、手白髮命（是は大后なり）を娶りて、生み給へる御子、天國押波流岐廣庭命（一人）。又、息長眞手王の女、麻組郎女を娶りて、生み給へる御子、佐々宜郎女（一人）。又、坂田大俣王の女、黑比賣を娶りて、生み給へる御子、神前郎女。次に、茨田郎女。次に、馬來田郎女（三人）また、茨田連小望が女、關比賣を娶りて、生み給へる御子、茨田大郎女。次に、白坂活日郎女。次に、小野郎女、亦の名は、長目比賣（三人）。又、三尾君、加多夫が妹、倭比賣を娶りて、生み給へる御子、大郎女。次に、丸高王。次に、耳王。次に、赤比賣郎女（四人）。又、阿部の波延比賣を娶りて、生み給へる御子、若屋郎女。次に、都夫良郎女。次に、阿豆王（三人）。此の天皇の御

子たち、幷せて、十九王（男七、女十二）。此の中に、天國押波流岐廣庭命は、天下を治めたまひ。次に廣國押建金日命も、天下を治めたまひ。次に、建小廣國押楯命も、天下を治めたまふ。次に、佐佐宜王は、伊勢神宮を拜きまつりたまへり。

此の御世に、筑紫君、石井、天皇の命に從はずして、無禮のこと多し。故に、物部荒甲の大連、大伴の金村連二人を遣はして、石井を殺さしめたまふ。

此の天皇、御年、四拾三歲。御陵は、三島の藍にあり。

△金箸宮　大和高市郡曲川村

安閑天皇の朝

廣國押建金日命、勾の金箸宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、御子ましまさゞりき。御陵は、河内の古市の高屋村に在り。

△成入野宮　大和高市

宣化天皇の朝

建小廣國押楯命、檜垣の廬入野宮にありて、天下を治めたまふ。この天皇、意富祁天皇の御子、橘之中比賣命を娶りて、生み給へる御子、石比賣命。次に、小石比賣命。次に、倉の若江王。又、河内の若子比賣を娶りて、生み給へる御子、火穗王。次に、惠波王。此の天皇の御子たち、幷せて五王（男三、女二）。火穗王は、志比陀君の祖。惠波王は、韋那君、多治比君の祖なり。

△師木島大和式上郡金屋村の四南

欽明天皇の朝

天國押波流岐廣庭天皇、師木島大宮にありて、天下を治めたまふ。この天皇、檜垣天皇の御子、石比賣命を娶りて、生み給へる御子、八田王。次に、沼名倉太玉敷命。次に、笠縫王（三人）。又、其の弟、小石比賣命を娶りて、生み給へる御子、上王（一人）。又、春

△沼名倉太玉敷　敏達天皇
△豐日命　用明天皇

日の日爪臣の女、糖子郎女を娶りて、生み給へる御子春日山田郎女。次に、麻呂古王。次に、宗賀の倉王（三人）。又、宗賀の稻目宿禰大臣の女、岐多斯比賣を娶りて、生み給へる御子、橘の豐日命。次に、妹、石垣王。次に、足取王。次に、豐御氣炊屋比賣命。次に、亦、麻呂古王。次に、大宅王。次に、伊美賀古王。次に、山代王。次に、妹、大伴王。次に、櫻井の玄王。次に、麻奴王。次に、橘本の若子王。次に、杼泥王（十三人）。又、岐多志比賣命の娘。小兄比賣を娶りて、生み給へる御子、馬木王。次に、葛城王。次に、間人穴太部王。次に、三枝部穴太部王。亦の名は、須賣伊呂杼。次に、長谷部若雀命（五人）。凡て、此の天皇の御子たち、幷せて、廿五王。此の中に、沼名倉太玉敷命は、天下を治めたまひ。次に、橘の豐日命も、天下を治めたまひ。次に、豐御

△炊屋比賣　推古天皇
△若雀命　崇峻天皇
△他田宮　大和式上郡

氣炊屋比賣命も、天下を治めたまひ、次に、長谷部の若雀命も、天下を治めたまふ。幷せて四王とも、天下を治めたまへり。

敏達天皇の朝

沼名倉太玉敷命、他田宮にありて、一十四歲。天下を治めたまふ。此の天皇、庶妹、豐御食炊屋比賣命を娶りて、生み給へる御子、靜貝王。亦の名は、貝鮹王。次に、竹田王。亦の名は、小貝王。次に、小治田王。次に、葛城王。次に、宇毛理王。次に、小張王。次に、多米王。次に、櫻井玄王（八人）。又、伊勢の大鹿首の女、小熊子郎女を娶りて、生み給へる御子、布斗比賣の命。次に、寶王。亦の名は、糖代比賣王（二人）。又、息長眞手王の女、比呂比賣命を娶りて、生み給へる御子、忍坂日子人太子。亦の名は、麻呂古王。次に、坂騰王。次に、宇遲王（三人）。又、春日中若子

△岡本宮の天皇　即舒明天皇

△池邊宮　大和十市郡

が女、老女子郎女を娶りて、生み給へる御子、難波王。次に、桑田王。次に、春日王。次に、大俣王（四人）。此の天皇の御子たち、幷せて十七王あり。その中に、日子人太子、庶妹、田村王、亦の名は、糖代比賣命を娶りて、生み給へる御子、岡本宮にありて、天下を治めたまふ天皇。次に、中津王。次に、多良王（三人）。又、漢王の妹、大俣王を娶りて、生み給へる御子、智奴王。次に、妹桑田王（二人）。又、庶妹、玄王を娶りて、生み給へる御子、山代王。次に、笠縫王（二人）。幷せて、七王あり。御陵は、川內の科長に在り。

用明天皇の朝

橘豐日命、池邊宮にありて、三歲、天下を治めたまふ。此の天皇、稻目宿禰大臣の女、意富麻多志比賣を娶りて、生み給へる御子、

△小治田宮　大和高市郡雷土村駒奈備山

多米王（一人）。又、庶妹、間人穴太部王を娶りて、生み給へる御子、上宮の厩戶豐聰耳命。次に、久米王。次に、植栗王。次に、茨田王（四人）。又、當麻の倉首比呂が女、飯女之子を娶りて、生み給へる御子、當麻王。次に、妹須賀志呂古郎女。此の天皇、御陵は、石寸掖上に在りしを、後に、科長中陵に遷しまつれり。

崇峻天皇の朝

長谷部若雀天皇、倉椅柴垣宮にありて、四歲、天下を治めたまふ。御陵は、倉椅の岡の上に在り。

推古天皇の朝

豐御倉炊屋比賣命、小治田宮にありて、三十三歲、天下を治めたまふ。御陵は、大野岡の上に在りしを、後に、科長大陵に遷しまつれり。

標註

新譯古事記（下卷）終

大正六年十一月卅日印刷
大正六年十二月五日發行

（定價金五拾錢）

編輯者　松雲堂編輯所編
大阪市東區本町四丁目四番地

發行者　石塚猪男藏
振替大阪一三六七五番

印刷者　堀越幸
大阪市西區阿波座二番町一番地

不許複製

販賣所

東京神田區美土代町三丁目一番地　富田文陽堂
振替東京三三〇七番

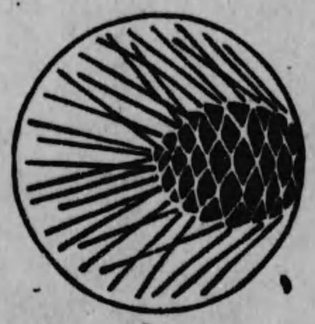
東京神田區美土代町二丁目一番地　石塚松雲堂
振替東京三三二六七番

◎松雲堂發行の各書は印刷製本頗る善美内容の豊富は類書中に超絶し大好評御賞讃を博し居れり

中村文學士著　熱語詳解　新註漢和大辭典　定價貳圓五拾錢　郵税拾六錢
中村文學士著　熱語註解　漢和新辭典　定價九拾錢　郵税八錢
松雲堂編輯所　國語漢文　自修辭典　定價七拾錢　郵税八錢
中村文學士著　新註（いろは引）國語大辭典　定價參拾六錢　郵税拾錢
林弘之著　熱語完成　英和大辭典　定價壹圓八拾錢　郵税拾貳錢
林弘之著　中學新譯　英和辭典（カナ字發音附）　定價九拾錢　郵税八拾錢
林弘之著　ポケット英和辭典（カナ字發音附）　定價七拾錢　郵税六拾錢
林弘之著　中學新譯　和英辭典　定價九拾錢　郵税八拾錢
中村文學士著　修養講話　定價四拾錢　郵税六拾錢
松雲堂編輯所　女子修養講話　定價四拾錢　郵税六拾錢
中村文學士著　人格修養　實業立志講話　定價七拾五錢　郵税八拾錢
中村文學士著　人格修養　常識成功講話　定價七拾五錢　郵税八拾錢
中村文學士著　大正青年及青年團講話　定價七拾五錢　郵税八拾錢
中村文學士著　日本民族論　定價貳圓五拾錢　郵税拾貳錢

醒醐惠端著　淨土法門獨立史　定價參拾貳錢　郵税拾錢
松雲堂編輯所　古今日本書畫名家辭典　定價貳圓貳拾錢　郵税拾貳錢
中村文學士著　大學中庸新註　定價參拾錢　郵税貳錢
中村文學士著　論語新註　定價六拾錢　郵税六錢
中村文學士著　孟子新註　定價八拾錢　郵税八錢
中村文學士著　文章軌範新註　定價八拾錢　郵税八錢
中村文學士著　續文章軌範新註　定價八拾錢　郵税八錢
玉椿莊主人著　唐詩選新註　定價七拾錢　郵税六錢
玉椿莊主人著　處世應用　論語講話　定價四拾錢　郵税四錢
西島良爾著　三字經千字文孝經忠經　新註韓非子鈔　定價四拾錢　郵税貳錢
土屋鳳洲著　書家畫家　題字便覽　定價八拾錢　郵税六錢
椰溪道人修錄　時代思潮より觀たる　論語義解　定價七拾錢　郵税六錢
一七學人編著　金鶴書著　新譯老子詳解　定價七拾錢　郵税六錢
一七學人編著　人格修養處世要訣　新菜根譚論解　定價七拾錢　郵税六錢

發行所　大阪市東區本町四丁目四番地　石塚松雲堂（電話大阪六六六番）



10

376
39

落